関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

昭陵遠望

著者	藤善 眞澄
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	42
ページ	4-6
発行年	2001-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024067

昭　陵　遠　望

藤　善　眞　澄

貞観二十三年（六四九）五月己巳、上（太宗）、含風殿に崩ず。年五十二。遺詔に「皇太子、柩の前に即位せよ。喪紀は宜しく漢の制を用うべし。秘して喪を發せざれ」と。

巨星の末期を『旧唐書』はこう伝えている。前年、体調を崩した太宗は、この年4月いらい翠微宮に療養生活を重ねていた。玄武門の変（626）で兄の建成を討ち即位してから23年、晩年は皇位継承をめぐる息子達の争い、両度にわたる高句麗遠征の失敗と派兵中止など、貞観の治も大きな翳りがみえはじめ、満足感と失意の相い半ばする情況に置かれていた。太宗の胸中いかばかりであったか。諡は文皇帝、廟号は太宗。長安に運ばれた亡骸は、その6月1日、太極殿に殯されたのち8月庚寅、醴泉県の東北、海抜1,188メートルの九嵕山上に待つ長孫皇后の昭陵に合葬された。貞観10年6月、36歳でみまかった長孫文徳順聖皇后のために、太宗は自分にとっては寿陵となる昭陵を造営し、来たるべき同穴の日に備えておいたのである。墳丘を築かず、玄宗の泰陵にみた八合目あたりの山腹を鑿ち、玄室がしつらえてあった。

1979年、陪葬の一人、初唐の元勲李勣の陵墓を核に昭陵博物館が設立された。その3年後、この地を訪ずれた時には、道が完備していないという口実で九嵕山に登ることが許されず、李勣の俗にいう下山冢上から、製紙工場の煙をすかして遠望するだけの惨めな旅に終った。後ろ髪を引かれる懐いで立ち去ってから10年、ようやく宿願を果すことができた。「封内一百二十里」と伝える90平方キロの陵園内は公称166基、実数は187基にのぼる皇族や功臣達の陪葬墓をひかえた、沈黙の世界である。その中、博物館となった名将李勣墓と、あたかも太宗の露払いか護衛するかのように並ぶ猛将尉遲敬徳、さらに太宗の第8皇子であり、かの則天武后に戦いを挑んで敗れ毒を仰いだ越王李貞、阿史那忠、張士貴、鄭仁泰。数多の公主（皇女）、中でも長孫皇后との間に生れ、太宗が最も慈しんだ愛娘、長楽公主の陵墓が相次いで発掘された。ここに及んで車道が整備された結果、九嵕山上への登りが可能になった次第。

太宗は貞観20年（646）8月、「功臣に葬地を賜うの詔」を発布した。功臣達に昭陵の南面

徐懋功（李勣）墓・昭陵博物館

左右を墓地として配分するというもので、翌年正月には早くも高士廉が陪葬の栄に浴し（『旧唐書』巻65）、次年度には宋国公蕭瑀。杜如晦とともに房杜つまり名宰相の誉れ高い房玄齢が、これに続いている（同上巻66）。封域を九十九曲する間、元の李好文がまとめた『長安志図』の昭陵図を手に、諸陵の配置を検討してはみたものの、ほとんど参考にはならなかった。それにしても、車窓に見え隠れする大小さまざまな陪葬墓群は、さすがである。『唐会要』巻21に歴代皇帝陵の陪葬者名がまとめて列挙されてあるが、他の皇帝に比べ圧倒的な規模と数を誇っている。

感激のクライマックスは、矢張り九嵕山であった。韋妃、長楽公主墓から峡谷を隔てて聳え立つ景観は、中国屈指の皇帝にふさわしい威容を今に伝えている。墓道から玄室に至るまでの深さ250メートル、前後に石門5基を配し、山上には桟道を渡して往復の便に供したといわれる。墓陵の北側400～600メートルには山門や祭壇、玄武門などの遺址があり、そこには唐代彫刻の傑作と目され、太宗の御馬6頭を板石に刻んだ、いわゆる昭陵6駿が置かれていた。しかし1914年、2駿は盗難に遭い人知れず海外へ運ばれ、現在アメリカにある。残りの4駿は厄を逃れ西安の陝西省博物館に移されているが、若干残る石像その他の遺址を拾い眺めながら、当初の荘厳はいかばかり豪華だったろうか、とつおいつ想像することであった。

陪葬墓群

篆刻の碑石が建つ「長楽公主墓」の玄室に案内される。太宗二十一女中の第五皇女（『貞観政要』巻5）、母后の兄、長孫無忌の長子すなわち従兄にあたる長孫沖に嫁いだが、のち無忌が則天武后の擁立に反対したため、武后の憎悪を買い、夫も嶺外に流された悲運の女性である。

外気は9月上旬の熱風にもかかわらず、墓道は下るにつれ涼、そして玄室は冷気に満ちていた。すでに見事な壁画や碑石等は公表されているが、未調査の妃嬪、公主の陪葬墓も恐らく、同じような型と規模を整えているのであろう。それにしても玄室に向う墓道の左上方に瀝然と残る盗掘の跡には、宿命的なものとはいえ、言い知れぬ空しさと寂寥感に襲われたことを、告白せねばならない。地上にもどり、外から盗穴

韋妃墓

に足を踏み入れると、的をはずして掘り下げたのち、方角を調整しなおしてから、再び掘り進んだ形跡が、一目瞭然である。

盗掘は世の習い、とは承知しながら愚なものである。埋蔵品の数かずは盗みを誘発させ、王朝の交替、支配力の後退とともに、再び日の目を見ることになる。史乗では厚葬を禁止する薄葬令が度たび発せられているが、いっかな効果はなかったようである。

宋の馬令撰『南唐書』巻15の鄭元素伝には、母方の伯父温韜が昭陵を暴いた話を紹介している。温韜は唐末・五代の群雄の一人、岐王李茂貞に仕えて耀州（現在の陝西省耀県）刺史となり、のち後梁に降って静勝軍節度使となった。この静勝軍というのは耀州一円を統轄するもので、漢の陵墓はもちろん、幸か不幸か、唐18陵の大部分が領内に含まれていた。

> 鄭元素自ら〔温〕韜の昭陵を發くを言う。埏道より下り宮室の制度を見るに、閎麗なること人間と異ならず。中に正寢を為り東西の廂には石牀を列べ、牀上の石函中には鐵の匣有り、悉て前世の圖書を藏む。鐘〔繇〕・王〔羲之〕の墨跡は、新たなるが如し。韜悉てこれを取る。韜死して元素これを得ること多しと為す

太宗は王羲之の書を愛するあまり、王羲之七代の孫である智永禅師が弟子の辯才禅師に托しておいた傑作、「蘭亭序」を騙し取ったという話があり、そのシーンを描いた名手、閻立本の筆と伝えるものさえ残っている。太宗は臨終に先だち、「蘭亭序」を自分とともに埋葬せよと皇太子に遺言しているが、鄭元素の言葉どおりだとすれば、郭沫若氏が、今に伝わる蘭亭序は王羲之の書に非ず、と主張したことへの反論になろう。廬山の青牛谷に生涯を終えたこの隠士鄭元素は、古書のコレクターとしても知られ、また伯父の温韜は地の利を生かし、唐の諸陵を手あたり次第に盗掘した、悪名高い人物。必ずしも眉唾ものではなかろう。昭陵発掘調査の日はいつであろうか、鶴首して待ちたい。

昭陵（九嵕山）全景

昭陵前庭の石像と筆者